

明治の佐伯三青年

龍溪・鳴鶴鶴谷

東京

御手洗 一 而

城山おろし

2 矢野の上京

矢野を見送った林は、家には帰らず、住吉神社の境内に腰を下ろして、茫然と番匠川の水面を眺めていた。水面の枯葉がさざ波で徐々に岸から離れてゆくように、矢野が自分の手の届かない遠いところへ行ってしまったような気がした。目標のない生活のいらだちに加えて、たった一人の友人まで失なってしまった。こんなとき、林はいつもこの境内に足を運んだ。自分の家から近いせいでもあった。住吉神社は、船頭町が番匠川につき出た突端にあり、後に藩の下船倉を控え、林の家はすぐその倉の前にあった。神社は、底筒男・中筒男・表筒男の住吉

三神に神功皇后を合せ祀っている。遠くに万年橋が見えた。

林は一人になってはじめて、自分と矢野のおかれた境遇について、うとましく感じはじめていた。気性のはげしい林は、自己意識の過剰なほど負けず嫌いであらうなやでもあった。しかし、それだけに貯えた天分的なものをもっていった。が一方では、どうにもならない人間の運命的なものも感じはじめていた。四教堂の教課においても、諸経の独看・輪講さえ誰にもひけはとらなかつた。それは矢野が一番よく知っていた。しかし、矢野にあるものが林にはなかつた。大砲にしろ汽船にしろ、矢野との雑談は、新知識としてそこまでで止まっている。矢野の場合は、一つの事象から、それを作り出す民族、社会

的背景、国に及ばず影響等、その洞察力と効果を、自分の国におきかえて考えることができた。これが林に矢野を尊敬させる要因でもあった。そして妙にうまのあう二人であった。

しかし、こうして別れてみると、その差がますますはげしくなるように思われた。林は生まれついた環境をうらんだかもしれない。「どうすべきか」という難問に對して、容易に解答を見出せそうもなかった。維新の原動力が下級武士の出身であったように、その行動型に氣付くほど余裕もなく、頑健な身体ももちあわせていなかった。淋しさよりも、むしろ虚脱状態に近かった。

矢野一家は、大分から和船の「すみとも丸」に乗りこんだ。八十二才の祖父多門翁を筆頭に、文雄兄弟に許嫁、女中若党という大家族であった。当時の船旅はのんびりしたものだった。瀬戸内の航行は、潮や風に左右されて、少しでもしけてくると、和船は港々に停泊を余儀なくされる。その都度、金比羅宮に参ったり、鞆ノ津を見学したり、物見遊山の優雅な道中であった。

「ある時は同胞三人が馬上の櫓に乗せられていると、道中筋おどりの馬子が、酒手の強請文句をならべ、若党が怒って、刀のツカに手をかけ、『おぬし、けしからん奴じゃ』と抜きかけるなんかは、世は明治でも、道中はまるで草双紙でも読む筋合、アノ通りの風情であったそうである」

と、後年龍溪の回想談を、当時郵便報知新聞の記者であった篠田氏が紹介している。

神戸から横浜までは、外国の蒸気船「コスタリカ」に乗った。さすがに蒸気船は風雨にも左右されず、快適な船旅の中にも、矢野は、西洋科学の力をまざまざと見せつけられたにちがいない。それ以上に、横浜に上陸してからは、驚かされることが一杯あった。すでに開港久しい横浜には、緋羅紗の洋服を着たイギリス兵があちこちに屯して、赤隊と言っていた。

横浜から東京は、馬車が走っていた。馬車はインド人が馭し、六郷の渡しでは、現在のフェリーさながらに、馬車乗客ぐるみ船の中に乗り入れるようになっていた。六郷を渡って東京に着くと、一行は一先ず教寄屋橋近く

の郷里出入の知人の家に落着いた。

息子の久作がなにくれと世話をやいてくれるのが嬉しかった。矢野は、東京から送られてきた書物が、ほとんど久作の手をわずらわせたことを知って特別に親近感を覚えた。大人数は、二三日して芝佐久間町の藩邸に移ったが、父光儀の連絡で、やっと下総流山県庁宿舎に旅装をとくことができた。そして夏も過ぎる頃、同じ佐久間町に、適当な家屋敷を買い求め、新居を構えることができた。

新居は、六百坪、長屋門つきの家屋敷で、土蔵付七間からあって、堂々たる構えであった。その頃は、幕臣が家を捨てたり、東京を離れたりして、売物があちこちに転がっており、東京の治安を浮き彫りにしていた。無償の家に義務づけられた塀を廻す資金が要する話も聞いている。龍溪の後日談によると、新居は廿五両で、その後品川の遊郭を買取り、移して母家を建増し、一家は母家に住んで、長屋には書生達が寝起きしていたという。

こうして落着きを取り戻した矢野の、新しい東京生活が始るのである。

長屋には、いつも三四人の書生が住んでいた。地方出の者もおれば、東京出身もいる。県知事一家は、公私共に忙しかった。東京生活になれない一家にとって、佐伯から連れてきた若党よりも、都会なれした書生は便利でもあった。又若者の立身出世を夢見る新職業でもあった。

或る日矢野は、書生部屋にかけた。
そこには、乱雑にちらばった書籍や、とっくり、なんともいえない薄汚れた男の体臭が充満していた。

「誰かいい塾の先生を知らないか」

矢野の言葉は丁寧であった。

「塾ですか。漢学塾もたくさんありますが、さてどこがよいかと聞かれましたも」

ぶしょうひげを生やした田部という男は、隣のきゃしゃな池田を見やった。

「そうさな。吉野金陵・安井息軒・田口江村……ずい分あるからなあ」

事実当時の私塾は、三島中州の二松学舎、中村敬宇の同人社、杉浦重剛の称好塾、他にも温知塾・三義塾といったところがあった。

「それでは、一番横着な先生は誰か」

貴公子然とした矢野の口から、とてつもない言葉をきかされて、書生達は顔を見合わせた。

「横着な先生ですか。さあて。田口文蔵先生は人を食った横着な代り、学殖もあると聞いておりますが」
東京育ちの池田の言葉であった。

これを機会に、矢野は江村塾に通うことになった。塾は本所四ツ目にあり、佐久間町からはかなりの距離があった。

当時の青年の間には、漢学の素讀回讀が流行していた。矢野は、午前四時の回讀に間に合うように徒歩で通った。羽織袴に大小を手挟み、冬に向って大へんな苦業であった。龍溪談によると、冬の寒空、霜の曉で、道に下駄の痕が一人分しかないことが度々あったとある。

矢野は後に塾へ寄宿したが、塾頭は痣あざのあった白根専一、先生の田口文蔵は、一癖ある面魂で、上眼づかいに人を眼下に見るふうがあり、噂通り人を食った人物であった。学問は相当あって、一見識を抱いていたが、細君は芸妓上りであった。新入りの矢野は、初めはおとなしくしていたが、次第に頭角を表わし、ある日大議論をた

ゝかわしたことがあった。先生は、慶喜公から大政奉還を問われたとき、横着者だけあって、それに及ばずと答えたらしい。こんなことがあってから、矢野は同輩に一目おかれ、先生からも認められるようになった。しかしその反面、矢野の方は次第に物足りなくなってきた。

こんな時、矢野はいつも郷里の四教堂を思い出し、明治四年の年が明けてから、退官した秋月先生を訪ねて昔をなつかしんだ。還暦を過ぎた先生は、豊後儒界を代表する広瀬淡窓の高弟として、昔ながらの儒者としての風格があった。矢野は、四教堂の教義から一步もでない漢学の物足りなさを訴えた。

「矢野君、それは当然だよ。学問の道は一つではない。すべての道が学問に通じる。鉄道敷設の話も聞いたであろう。蒸気船にしろ鉄道にしろ、従来の儒者になんができる。結局は外国に頼るしか方法がない。これらの新しい知識を吸収するのは、君達青年の学問だよ。新政府がいかにじたばた騒いだところで、これだけの大事業が一度にできるものではない。あらゆる分野に青年の力が要る。維新の变革は、特定の大藩に任せ

が、これからはそうはいかん。現に地方では不平分子が動きだしている。いろいろな事情の違う各藩を、一つの統一国家に組み入れることは、なみ大抵の仕事ではない。不平があり不満があっても急いではならんんじゃない。急いでは必ず事を仕損じる。薩長の国ではないんだ。大きな観点から日本人の英知を集めなきゃならぬ。それにしても……」

先生の眼が、悲しそうな表情になって、話が急に変わった。

「佐伯の方はどうなっているかなあ。もう四年になるか。みんな元気でやっておればよいが」

矢野は、それから口を出さなかった。先生が知っていると思ったからである。佐伯では下級藩士による一つの騒動が起っていた。藩政に不満な兵隊党とこれに反対する学校党との不穏な行動であった。矢野は藩邸に出入りしてよく知っていたが、いずれも先生の門下生である。先生を悲しませることを避けたかったのである。

「しばらくの辛棒だが、食えないのが一番困る」
ぼつんと言ったのが印象的だった。

このとき矢野は、ふと林のことを思い出していた。

なお秋月橋門は、知事に在任中は俸禄の余りがあれば、ことごとくこれを郷党・親戚の貧しい者、または自分の若い時に世話になった家に分ち与えていたので、役をやめた時にはほとんど無一物であった。と市史に記されている。詩文にすぐれた橋門には、『橋門韻語』の遺著があり、師を追慕した門弟達の建碑が、藩公の菩提寺である養賢寺境内に残されて、その偉業をたゞえている。

(つづく)

(10ページの続き)

出来が不満か、それとも李賀の実相に反すという意味か知らねど、『狐嫁詞』を見れば聊か首肯されるものがあると思う。

中島子玉の代表作「牛壘」の如きは丑時詣を詠んだ怪詭、瑰麗、五彩目を奪う者がある。

秋室はそれ程絢爛豪華なものとは適切でないところ々の良さを得たものが良いという観点で唐以降清初に至る百数十名の李賀研究者を当否を評定しながら、代表作二百餘首集めて『錦囊遺彩』と名付けて出版すべく用意していた。外にも『錦囊遺録』とか『錦囊遺彩続録』とか、或は『錦囊遺彩補老鐵一家』と題じて楊維楨(鐵崖)の集録を作り、『啼髮集鈔』等鈔本を李賀に関する研究書を次々と編集し李賀集大成とも云うべきものを作った。

(つづく)